

アメリカのリック・デモンド選手が優勝したものの、検査により興奮剤であるエフェドリンが検出され、ドーピング検査による初の金メダルはく奪となった。ぜん息の持病に対する治療目的の使用であったが、その訴えは却下

1970年代 ステロイドの使用がますます増える

1974年 ステロイドに対する検出法の導入

1976年 蛋白同化ステロイドが禁止物質リストに加えられる

1988年 ソウル・オリンピック陸上100m。カナダのベン・ジョンソン選手が、当時の世界新記録で優勝するものの、ステロイド（筋肉増強剤）が検出され、はく奪となる。2年間の資格停止後、さらにホルモン剤の使用が明らかになり、永久追放となった

1998年 自転車競技の最高峰ツール・ド・フランス。エリスロポエチン（造血作用）による違反が多数検出された

↓ドーピング防止活動に対する競技を超えた統一基準の策定、検査、

実施を行なう国際機関の必要性が認識される

1999年 “スポーツにおけるドーピングに関するローザンヌ宣言”が採択され、同年11月に世界ドーピング防止機構（WADA）が設立された

2001年 国内でのドーピング防止活動の推進、調整機関として、日本アンチドーピング機構が設立された

2003年 世界ドーピング防止規定

2007年 スポーツにおけるドーピングの防止に関する国際規約が発行し、世界中で検査数が増加

なぜドーピングはいけないのか

オリンピックなどの世界最高峰の大会を見て、みなさんは選手から多くの感動をもらうことがあるでしょう。そんな感動を与えてくれた選手が、後日ドーピング違反で処分された。そんな時みなさんはショックを受けるだけでなく、スポーツに対してある種の不信感

を抱くようなことはないですか？

WADAが作る「WADA規範（ドーピングに関する法律）」には、以下のようにアンチドーピングを求める精神について述べられています。

ドーピング防止は、スポーツがもつその価値を保護する事を目的としている。これは、“スポーツ精神”と呼ばれる、オリンピック精神の神髄である。スポーツ精神は、人間の魂、身体及び心を祝福するものである。スポーツが持つ価値には以下のものがあげられる。

・倫理観、フェアプレーと誠意
・健康
・優れた競技能力
・人格と教育
・楽しみと喜び
・チームワーク
・献身と真摯な取り組み
・規則・法律を尊重する姿勢
・自分自身とその他の参加者を尊重する姿勢
・勇気
・共同体意識と連携意識

このように、スポーツがスポーツであるために、そしてスポーツ（に関わるすべての人々）が心身ともに健康なものであるために必要不可欠なものとされるべきなのです。

日本でのアンチドーピング活動

1990年代後半までは、アンチドーピング活動はJOC（日本オリンピック委員会）といくつかの競技団体によって、主として日本代表選手を対象に施行されてきました。上述したように2001年にJADAが設立されて以来、日本ハンドボール協会も含め各競技団体がJADAに加盟し、検査回数を増やしてきました。

さらに03年に静岡国体においてドーピング検査が導入され、検査対象が一気に拡大することになりました。

2000年代前半には、年間2000検体程度であったことから、諸外国に比べて検査数が少ないことが指摘され、それを受けて、

未来を担うハンドボーラーのための

「ドーピング」ってなんだろう？

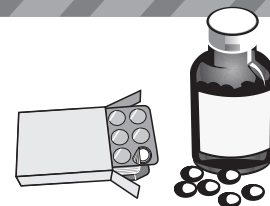
貝沼 圭吾

かいぬま・けいご、1979年生まれ。東海高（愛知）でハンドボールに出会い、大学時代からは審判にも携わる。現在は国立病院機構三重病院で小児科医として、運動誘発ぜん息などの研究診療に従事。同時に現役レフェリー、三重県審判長としても活動し、日本協会では審判部員、アンチドーピング特別委員会委員、医事委員としてハンドボールと深く関わる毎日を送っている。

質問、疑問をお寄せください！

当連載に関係する質問や疑問があれば、遠慮なくお寄せください。特別委員会のみなさんも、ハンドボーラーがアンチドーピングのどんな点を知りたいのか、とても興味を持っています。

お名前（ペンネームも可）、年令（学年）、質問事項をご記入の上、144ページ下欄の宛先より「『ドーピング』ってなんだろう？」係までメール、ハガキ、FAXでお送りください。



「ドーピング」という言葉を聞いたことはあるだろうか。スポーツで好成績をあげるために禁止されている薬物などを使うことだ。「自分には関係ないよ」と読者のみなさんは思うかもしれないが、じつはそうでもないんだ。この連載を通して、一度「ドーピング」について学んでみよう。

Vol.3

ドーピングの歴史

連載も3回目を迎えました。今回はドーピングの歴史、アンチドーピング（ドーピング防止）の道のりをご紹介します。

まず、「ドーピング（doping）」という英語の起源に触れてみたいと思います。オランダ語で“dop”

というブドウの皮から作られるアルコール飲料に由来すると言われており、この“dop”は、南アフリカの原住民たちが儀式で舞踊を演じる前に飲んでいたとか、兵士が戦意高揚させるために飲んだなど諸説ありますが、興奮作用を目的とした飲み物がその語源となっているようです。

近代スポーツにおけるドーピングの歴史

1865年 アムステルダムでの運河水泳におけるオランダ選手の覚せい剤使用

1886年 600km自転車競技におけるイギリス人選手の興奮剤使用

↓過剰摂取により最初の死亡事故

1904年 セントルイス・オリンピック マラソン競技。アメリカのトーマス・ヒックス選手が優勝直後に倒れた。数時間後に意識は戻ったものの、疲労防止のために興奮剤入りのブランドーを飲用していることが判明

↓当時は、規則がなかったため今も公式の金メダルとして認定

1928年 さまざまな国際競技団体において、興奮剤の使用を禁ずる声が高まるが、検査手段がなく、効果なし

1950年代 合成ステロイドホルモンの使用が増え続けた

1960年 ローマ・オリンピック 自転車競技。デンマークのジェンセン選手が競技中に急死する事件が発生。興奮剤の服用によるものであった

↓ドーピング薬物検査導入のきっかけに

1964年 東京オリンピック中に開催された国際スポーツ医学会議で、IOC（国際オリンピック委員会）によりドーピングを禁止し、排除する決定が下された

1967年 IOCに医学委員会が設置され、最初の禁止リストが作られる

1968年 グルノーブル冬季、メキシコシティ夏季オリンピックで初の検査

↓興奮剤、麻薬等約30種類が対象

1972年 ミュンヘン・オリンピック 競泳競技400m自由形。ア

現在は年間5000検体以上の検査が実施されるようになっていました。

検査件数が増大されたことによって、検査対象は日本代表とといったトップレベル競技者が参加する大会だけでなく、国内レベルの競技者が参加する大会においても検査が実施されるようになりました。その結果、ドーピング防止規則に関して十分な情報が行きわたっていない環境にある競技者が検査対象となり、なぜ薬などの使用が原因で違反となるいわゆる「うっかりドーピング」が多く発生することとなりました。

こうした現状があり、都道府県や各競技団体では日本代表選手だけでなく、検査が想定される大会への出場選手に対しての教育啓発活動が求められるようになってきています。

ち上げ、現在までに約4500人が研修を受け認定されています。みなさんの近くにスポーツファーマシストがいるかどうかは、スポーツファーマシストのHP(JADA)からのリンクで閲覧可能)の中で地域別の検索ができますので、ご利用いただければと思います。

日本協会における アンチドーピング活動

日本ハンドボール協会においては、1990年代後半からドーピング検査が開始されました。当初は、熊本で開催された世界選手権、また各種アジア大会、日本リーグプレーオフにおいて検査が施行されており、その対象選手は国内最高峰レベルの選手がおもでした。

2001年にJADAに加盟以降、全日本総合においても検査が開始されました。当時は年間の検査数も50検体と少ないものでした。06年からは競技会外検査(試合以外の抜き打ち検査)が始まり、国民体育大会においても検査がス

タート。また、高校生を対象とした検査も始まりました。

09年になると、全日本実業団、全日本インカレ、日本リーグレギュラーシーズンもその対象大会に指定され、対象となる選手が増えた結果、年間検体数も100程度と倍増しました。さらに、これまで大会終盤の準決勝、決勝といったレベルでの検査施行でしたが、12年には全日本社会人選手権、インカレにおいて初日から検査が施行されることになりました。

ドーピング検査が始まったころは、まずはトップレベルにある選手を対象に施行し、それによって競技の公正性を保ち、選手の健康安全を確保するという目的を果たしてきました。みなさんもご存知の通り、薬物の進化をドーピング検査が追いかけるという構図がずっと繰り返されているというのが現状です。

そして近年においては、このアンチドーピングの意識をもつと広めなければならぬという考えから、検査対象を国際レベルの選手

から国内レベルの選手にまで広げ、また年令層もより下げていつていうという印象が強くなりました。

これは私の考えですが、今後はその傾向がもっと強くなると思っています。今まで、中学校、高校の選手、指導者のみなさんにとってドーピング検査は、「自分には関係ないよ」という存在だったと思います。ですが、着実にみなさんのものに検査が近づいてきていると言っても、決して言い過ぎではありません。

日本協会としても、若い世代からのアンチドーピングへの意識を高めることをより強く推進していきたいと考えています。

「うっかりドーピング」でハンドボールを失わないためにも、全国大会をめざす中高生のみならず!! 大会に参加し、自分が検査対象となっても、「いつもきちんとしているから大丈夫」くらいの気持ちでいられるように、日々の生活を送ってほしいと願っています。